

4/17/2011

「歎呼の後に」 マタイ21:1-11

主イエスは十字架につけられる前の日曜日に、エルサレムにロバに乗って入城された、とマタイの福音書は記しています。それを見た群衆は興奮し、棕櫚の枝を打ち振って叫びました。「ホサナ、いと高きところにホサナ。」これがパームサンデー、棕櫚の日曜日と呼ばれる所以です。

この光景を当時のイスラエルの歴史的背景において見直してみましょう。

ユダヤの民はローマ帝国の植民地でした。皇帝は、頑固なユダヤの民を征服するのに相当苦勞したようです。

そこで彼は一つの名案を考え出します。それは、エルサレムにある神殿に勤める宗教指導者達を手なずけて、つまりにユダヤ人の宗教的基盤を押さえ込むことによって、ユダヤの民を精神的に征服するという方法です。

この方法は著しい効果をもたらしました。祭司長やパリサイ人や律法学者の多くは、自らの地位と安泰を図るために、ローマ皇帝の言いなりになったのです。彼らは自分の民に向かってローマ帝国の下にいるのは神の意志であり、甘んじて受け入れなければならない宿命だと教えたのです。

このような状況の中で、主イエスはロバに乗ってエルサレムに入城しました。何故馬でなくロバだったのでしょうか。

馬はローマ帝国の権力の象徴だったからです。そればかりでなく、馬は、ローマ帝国に膝を折り、腰をかがめていた宗教指導者達をも象徴していたからです。

ロバに乗って入城することにより、主イエスはローマ帝国とユダヤ宗教指導者達を厳しい批判のまな板にのせたのです。

人間を人間らしく生かす真の権威は政治的権力や墮落した宗教ではない。そうではなく、ロバに乗ってやってくる平和の君、これこそ、真の権威なのだ。そう主イエスは言いたかったに違いありません。

だからこそ、群衆は喜んで主イエスを迎えたのです。「いと高きところにホサナ」と叫んだのです。

私たちは、あの群衆に私たち自身を発見しないでしょうか。それが証拠に、私たちが受けた洗礼の時のことを思い出してみましょう。あの時、私たちは主イエスに従うことを決意し、神と会衆の前に誓いました。「私はイエスを私の主、私の救い主として受け入れます。」

つまり、私たちは棕櫚の枝を打ち振り、歎呼の声をあげ、「いと高きところにホサナ」と叫んだのです。

2000年前のあの日曜日に高らかに上がった歎呼の声はやがて消えていきました。その後何が起こったのでしょうか。

5日後の金曜日、同じ群衆は叫んだのです。「イエスを十字架につけよ。十字架につけよ。」

ここにも私たちは群衆と二重写しになっている私たち自身を発見するのです。

私たちは嫌いな人、どうしてもやっつけたい人を「悪魔」よばわりすることがないでしょうか。キリストはその人のためにも命を捨てられたことを忘れてしまうことがないでしょうか。その時、私たちは主イエスの体に釘を打ちつけているのです。

私たちはパウロが、コリントやローマ等の教会へ送った「何をおいても悔い改めなさい。」という言葉に聞く耳を持たず、無関心を装うことはないでしょうか。そういう時私たちは主イエスを十字架につけているのです。

私たちは、考えや意見の相違にのみ関心を向けて、「あなたがたはキリストにおいて一つである」というパウロの言葉を忘却してしまうことはないでしょうか。そういう時私たちは主イエスを十字架につけているのです。

あの「イエスを十字架につけよ」と口々に叫んだ群衆は、私たちの代表なのです。私たちの象徴なのです。

私たちは今レントの季節にいます。レントは自分自身を深く見つめ、悔い改める季節です。ですから私たちは祈らなければなりません。「神よ、この私をお赦してください。」

しかしキリストの福音はそこで終わるわけではありません。私たちの祈りは聞き届けられる。このような赦しがたい私たちを主イエスは赦したまう。これが福音の真髄です。主イエスは十字架の上から叫ばれました。「神よ、彼らを赦したまえ。」主イエスは今私たちのために同じ叫びをあげておられるのです。「神よ、彼らを赦したまえ。」

だからこそ、私たちは立ち上がることができるのです。やり直すことができるのです。

この確信こそ私たちを生かす希望と勇気の源です。主イエス・キリストの福音そのものです。